

Title	直腸癌
Author(s)	高橋, 明
Citation	癌と人. 5 P.14-P.15
Issue Date	1977-06-01
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/24203">http://hdl.handle.net/11094/24203</a>
DOI	
rights	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# 直 腸 癌

高 橋 明\*

## —直腸癌とは—

人間の腸は十二指腸・小腸・大腸・直腸に分けられ、小腸は空腸と回腸に、大腸は盲腸と結腸に分けられております。さらに、結腸は上から上行結腸・横行結腸・下行結腸・S状結腸の各部位に分けられております。

直腸はS状結腸につづく消化管で、その出口が肛門です。直腸はその長さが約20cmで、消化管とはいっても消化吸收の働きはなく、胃・小腸・結腸で消化され吸収された排泄物、つまり便を一時ためておき、適当なときに肛門から排泄する役割を果たします。

直腸癌とは、ここにできる癌で、腸にできる癌のうち、約60%がこの直腸癌となっております。

## —直腸癌は増えている—

最近、胃癌の頻度は漸次減少しておりますが、これにとって代って腸の癌（結腸および直腸癌）が急にふえてきております。日本の胃癌というのは、1955年には、男子の場合、全部の癌の55.3%が胃癌でした。それが1960年には51.2%、1970年には43.5%というふうに減ってきております。ところが、腸の癌はふえて、1985年頃には日本でも結腸および直腸癌が14.4%になり、アメリカの13.1%と並ぶと考えられております。腸の癌がふえてきた原因は、日本人の食生活が欧米のそれに近づいてきたためともいわれております。というのは、動物性脂肪をとることによって腸内細菌叢が変るとか、あるいは胆汁の組性が変わることが結腸癌や直腸癌の原因であるという見解が強く出されているからです。

## —直腸癌の症状—

直腸癌は便通の異常と下血が特徴的な症状です。直腸に癌ができますと、直腸が狭くなり、そのため力まないと便が出なくなったり、便が細くなったりします。また、癌の表面はもろく出血し易いので、血液が直腸の粘膜を刺戟して裏急後重とよばれる、いつも便意があるのに便が出ないという症状もおこってきます。腸内のガスが、癌の病変部から先へ出られず、上のほうにたまってしまうために腹がはって苦しくなることもあります。

下血も直腸癌の重要な症状の一つです。また、粘血便といわれる、ゼリー状の粘液と血液が混じっている便が出ることもあります。このほか便秘と下痢が交互につづいたり、排便のとき、あるいは排便に関係なく肛門あたりの不快感や圧迫感があったり、痛むこともあります。

以上は、直腸の進行癌と早期癌をひっくるめた症状ですが、早期に直腸癌を見つけて治療しないと完全に治すことは不可能な現在、特にどのような症状に気を付けなければならないのでしょうか。

## —早期直腸癌の症状—

血便ないし肛門出血に注意しましょう。血便の場合でも、大きな進行癌の場合と違って、持続的なものはほとんどなく、時たま見られる程度のものであります。普通便の排便に引続いて、そう鮮血ではない血液が滴下するか、あるいはチリ紙に付着して、しかも痛みはないという場合は特に注意しましょう。逆に、このような出血をみたらからといって、それがすぐに直腸早期癌と結びつくわけではありません。肛門管の中は病変の多いところですので、痔核や裂肛などの場

\* 大阪大学助手（微生物病研究所附属病院外科）

合も出血は見られます。要するに、ごくわずかな症状でも病変の存在を疑って、専門医にみてもらうことです。

### 一直腸癌早期発見への道一

直腸癌は、症状が比較的に見つけやすい癌です。しかし、その割に発見がおくれがちになり、手遅れになりやすいのはどうしてでしょうか。直腸癌の初期ならびに中期には、著しい全身症状は現われてきません。というのは、直腸は消化吸収の働きがないからです。即ち、一見健康そのものように思われる人、特によく肥えていて、体格もよい人、また若い人ほど手遅れになりがちです。

直腸肛門部の疾患は、心理的に羞恥心の強い患者にとっては、医師の診察を回避することが多い病気の一つであること、便は不潔なものであるという観念が固定して、便の性状（便の色、血液や粘液が混っているかどうかなど）を見ようとしなないことです。また、便秘、下痢、腹がはるなどの症状は、一般に腹具合が悪いときでもみられることから、軽く考えがちで、つい医師の診断を受けるのが遅くなるためでありましょう。

患者が出血などの症状を訴えてきた場合、直腸・肛門部に病変があるにも拘らず、患者の気持を察して、肛門や直腸を精査せずに単なる痔とか胃腸炎と診断して治療されている場合も少なくありませんので、必ず専門医に見てもらうことです。

### 一直腸癌の診断一

直腸癌の診断はごく簡単です。直腸癌の80%以上は肛門から指を入れてとどく範囲内にできるので、指一本の触診で、癌の有無を診断することができます。触診でわからないときは直腸鏡でしらべたり、レントゲン検査も行ないます。出血がある場合、直腸鏡でのぞいてみて、直腸鏡がのぞける範囲内に病変がなくても、その上から血液が下りてきているときは、上のほうを精査します。このときはファイバースコープを用いたり、あるいはバリウムを肛門から注入して腸の写真をとって診断することになります。

直腸癌について多いS状結腸癌（約20%）やその他の結腸癌の診断も同じ方法で行なわれます。

### 一直腸癌の治療と成績一

直腸癌の治療法は早期に発見して、癌を手術的にとり除くことです。直腸早期癌の場合、手術後の5年生存率は100%です。即ち、直腸早期癌は手術をすれば完全に治るということです。直腸癌の手術成績を年齢別に5年生存率でみると、表のように、29歳以下の若い人の場合、その成績がとくに悪いのが目につきます。これは若い人ほど手遅れになりがちであるということをお話しております。

表. 直腸癌年齢別5年生存率（'46～'65根治手術）

年齢	症例	5年生存	%
～29歳	12	3	25.0
～29歳	27	14	51.9
～49 "	75	43	57.3
～59 "	100	65	65.0
～69 "	97	47	48.5
70～	31	16	51.6
計	342	188	55.0

（梶谷による）

直腸癌の5年生存率は55%と胃癌など他臓器の癌に比べるとその治療成績はかなり良好なものです。

将来は、胃癌がそうであるように、早期発見に努力が向けられるべきです。

### 一定期検診を受けよう一

阪大微研外科では、大阪癌研究会とタイアップして、乳癌の集団検診を現在行なっておりますが、今年からは大腸癌、特に多い直腸癌の集団検診を行なう予定にしております。その際は、はずかしがらずに、めんどうがらずに、自分では健康に自信のある方でも、必ず検診を受けるようにおすすめします。